# 学生たちの目に映った白石とは？

**9**つのゼミがさまざまな角度から描いた今回のイベント。この日のために、20回以上も白石を訪れてくれた学生もいた。

研究の一環とはいえ、白石の自然や人に触れ、学生たちはいった い何を感じたのだろうか？　学生と教員の皆さんにメディアフェスタの感想とともに、白石への思いを語ってもらった。

大槻（おおつき）　智恵（ちえ）さん
（大河原町・白石女子高出身）
ぽっかぽかコンサートを担当

## 協力してくれた皆さんに本当に感謝します

**今**回のコンサートで重視したことは、白石市で活動する団体の方々に出演してもらうこと。市外から来た私たちと、市内の人たちが協力してコンサートを行うことです。

最初はお客さんが集まるか不安でしたが、たくさんの方に来ていただき、アンケートにも「楽しかった」と書いていただきました。こちらが「ぽっかぽか」にさせるはずが、逆に私たちがジーンと温まってしまいました。

白石の思い出エピソードを集めるために、商店街などを取材しました。忙しい中優しく答えてくれたことがとてもうれしかったです。白女出身で白石のことを知っているつもりでいましたが、活動している団体が多いこと、特におばちゃんたちの元気さに驚かされました。

ただ、同世代の人たちの活動が少ないのかな、という印象があります。大学がないこともありますが、地域にもっと目を向けて頑張ってほしいですね。白高と白女が統合するので、これを機に地域と協力して白石を盛り上げてほしいです。

高橋（たかはし）　聖大（たかひろ）さん
（村田町・白石高校出身）
ＬＩＶＥアテネを担当

## 白石の人の温かさを感じました

**白石**高校時代は、白石のことをあまり知らなかったのですが、今回のイベントを通じて、白石の人たちの温かさを感じました。

市外から来た私たちが、空き店舗を利用してにぎわいを作ったことに、市民の皆さんはとても感謝してくれました。

今後は、市民だけじゃなく、外との連携が大切かなと感じました。

白石の映像などを５時間にわたりインターネット配信した大野ゼミの皆さん

## 水路やアテネなどを活用して外へ発信を

**城**下町の街並みと水がとてもきれいで、歴史を感じるまちだと思いました。親切な人が多く、親しみやすいまちです。

白石和紙を初めて知って、パリコレや京都で使われているすごい特産品であることに驚きました。伝統産業として残していってほしいです。

ただ、良い所なのに人が少ないのが残念。市役所の人がもっと白石の良さを知ることが大切だと思います。

水路やアテネなどの施設を活用して外への発信を充実させれば、多くの人が訪れると思います。アテネで番組を作ってインターネットで配信してはどうでしょうか？　そして、学生が集うまちにしてほしいです。

**●佐藤（さとう）　真弥（まや）さん**
**空き店舗を利用して新しい博物館展示を手掛けた**

地域の人たちと関（かか）わり、文化を学び、地域の再構成を一緒に考えていきたいと思いました。

白石については、片倉小十郎や白石城などでにぎわっている所と、そうでない所が極端に見える部分もありましたが、温麺（うーめん）などの文化一つ一つをとても大切にしていると感じました。

こうしたイベントが、地域の皆さんが「もっと頑張ってみよう！」という、一つのきっかけになればと思います。

**●會澤（あいざわ）ゼミの皆さん**
**市民の協力を得て、さまざまな白石グッズを製作**

市民の皆さんとのコミュニケーションを重視し、触れ合うことで作品ができました。

東京や埼玉から来た人から「白石を知るとても良いものでした」とか、白石の人からは「私たちも知らなかった。ここまで調べてくれてありがとう」「商品化したら？」といった言葉もいただきました。

本当に大好きになった白石ですが、「空き店舗の有効活用ができないか？」ということ。例えば、シャッターに絵を描いて、白石を表現するなどの工夫ができないかなと感じました。

准教授　千葉（ちば）　正樹（まさき）さん
（地域文化論・都市史などを研究）
白石本郷まちなみミュージアムを担当

## 多くの観光客が訪れている今こそ、この流れを一過性にしないためのチャンスです

**以前**は、仕事などを通じてたびたび白石市を訪れていました。今回のメディアフェスタの開催に当たっては、学生たちの勉強の場としてうってつけの環境だと思いました。

ところが、実際に白石を訪れてみると、人けがなく、若い人がまちを歩いていないという現状を見て、私が持っていた元気な街並みのイメージとの落差感は否めませんでした。

しかしながら、ゆっくりとまちを歩いてみると、シャッターは閉まってはいますが、その奥ではきちんと生活を送っている人たちがいて、「そこまでのダメージは受けていないのではないか」ということに気付きました。

歴史や文化など、土台がしっかりとまちに根付いていると同時に、住宅都市・居住都市としての機能は十分にあると思いました。

今、多くの観光客が白石を訪れています。この流れを一過性のものにしないためにも、来年までが一つのポイントであり、チャンスだと思います。その間に何かを考えなければならないと思います。訪れた観光客が気持ち良く旅行できるようにすることはもちろん、住んでいる地域の人たちがどのように関わっていくかだと思います。

教授　大野（おおの）　実（みのる）さん
（メディア産業などを研究）
ＬＩＶＥアテネを担当

## 言葉によるブランド化の工夫を

**東京**出身の私は、正直、白石のことは知りませんでした。白石城や沢端川の梅花藻（ばいかも）などのきれいな部分が、関東で知られていないことが、本当にもったいないと思います。

自分たちで完結するのではなく、できるだけよそから多くの人に来てもらえるよう、ピーアールしていくと活性化につながるのではないかと思います。大正ロマン漂う建物や、季節に合わせて食べ物や飲み物をしつらえて、人を呼び込むことも良いのではないでしょうか。そこに、言葉によるブランド化を合わせるとさらに良いと思います。

ちなみに、私たちのゼミで考えた白石のキャッチコピーは、「戦国の風情を描くみちのくのパレット」です。

准教授　松本（まつもと）真奈美（まなみ）さん
（日本文学などを研究）
ことばで見る白石を担当

## 何度も接することで道が開ける

**自分**の専門分野を活かしながら、地域の皆さんに喜んでいただけるものができればと思いました。

その中で、白石で活躍している人たち、いろいろな世代の人たちの言葉を届けたいと思いました。

率直に言って、ここでイベントをやってお客さんが集まるのかという不安もありました。

しかし、実際に地域の方々とお会いして何度も話をしていくうちに、皆さんも心を開いてくれて、そこから道が開けるということを学生たちも経験したと思います。

すぐに物事を判断するのではなく、何度も地域の皆さんと接することで、多くの協力をいただくことができました。②

**●教授　小原（おばら）　俊文（としふみ）さん**
**（英米文学などを研究）**
**どっこい、活字は元気だを担当**

配布した印刷物「和一緒（わっしょい）」は、市民の皆さんからお褒めの言葉をいただきました。学生一人一人が見た白石を、上手にリポートしてくれたと思います。

白石は「水が多いまちだな」という印象が強いです。都会にはないような清潔さがありますね。残念なことは、やはり中心街の空洞化が進んでいることでしょうか。

**●広瀬愛（ひろせあい）さん（准教授）とゼミ生の皆さん**
**白石　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ**
**白石デート大作戦を製作**

予想よりも多くの方に来ていただき、大変うれしかったです。

苦労したことは、野外での撮影上、どうしても天候に左右されたことですね。

そんな中でも、まちの中を細かく見ていくと、面白い物や面白い場所を見つけることができました。今回の作品のシナリオも、まちを歩いたことで見つけることができました。

正直、「どうして白石？」と思う気持ちが最初はありました。しかし、何度も白石を訪れるうちにとても良い所だと思うようになり、「白石愛」に変わっていきました。